

論文審査の結果の要旨

氏名：大 西 紗也子

博士の専攻分野の名称：博士（歯学）

論文題名：舌部分切除患者の心理面の変遷に関する質的研究—M-GTA 分析による—

審査委員：（主 査） 教授 米 原 啓 之

（副 査） 教授 植 田 耕一郎

教授 今 村 佳 樹

教授 岩 田 幸 一

頭頸部癌に対する治療では外科療法・化学療法・放射線療法などが行われ、術後に高頻度で摂食嚥下機能障害や構音障害を伴う。治療後にみられる食べる楽しみの喪失や、家族や他者とのコミュニケーション能力の低下は、家庭復帰・社会復帰を困難にし、日常生活に大きな支障をきたすことで、Quality of Life（生活の質：QOL）の低下を招くことが少なくない。日本において、頭頸部癌患者の40%は口腔癌であり、その60%が舌癌であると報告されている。舌は、構音、摂食、咀嚼、嚥下などの重要な機能を担っているため、舌癌手術後はこれらの機能の障害が認められる。舌癌切除後の機能障害は切除の部位や範囲に影響され、舌部分切除術と半側切除術では比較的機能障害の程度は軽いと報告されている。特に、部分切除術では社会復帰上の機能的障害は少なく、精神的健康に大きな問題はないとされている。このため、舌部分切除患者に対する心理面の変遷や精神的健康への配慮の必要性についての研究や報告はない。しかし、舌部分切除患者でも、機能障害の程度は比較的軽度であるものの機能障害に対する訴えは強く、機能回復だけでなく社会復帰に必要な心理面のサポートを必要とするケースが多い。そこで本研究では、舌部分切除患者の心理面をサポートする新たな治療方法を開発するための基礎的研究として、舌部分切除患者の術前から術後の機能面の変化と心理面の変遷を明らかにすることを目的とした。

対象者は、2016年5月～2017年6月の間に、舌癌初発により日本大学歯学部付属歯科病院に入院し、舌部分切除術を受けた患者8名とした。対象者に対し、術前・術直後・術後3カ月・6カ月の4回インタビューを行った。インタビューはインタビューガイドに沿って行い、対象者の回答次第で内容を深く掘り下げることが可能となる半構造化面接を採用した。ただし、インタビュー対象期間中に追加治療が必要と診断された対象者については、4回行ったインタビューのうち追加治療が決定した後のインタビューを分析から除外した。分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach, 以下 M-GTA）を採用した。インタビューデータから概念を生成し、同時に概念の相互関係も検討した。複数の関連しあった概念のまとまりをカテゴリーおよびコアカテゴリーとし、分析における全体像を示す結果図を作成して、それに基づき、心理面の変遷を検討した。

その結果、以下の結論を得た。

1. 機能的・精神的障害が少ないとされている舌部分切除患者であっても、告知前から研究終了時の術後6カ月まで、転移・再発や食事、会話に対する不安が存在し、癌の転移・再発に対する不安や術後の生活に適応するための心理的な変容が生じた。
2. 対象者が摂食嚥下リハビリテーションに対して求めることは、術直後～術後3カ月までは機能回復であり、機能が安定してきた術後3カ月～6カ月では、機能回復だけでなく、心理支援も求めている。
3. 対象者が自分の機能に多少の不満を持ちながらも、障害に適応して、日常生活に上手く対処出来るように支援することが、機能回復と同様に重要であることを、医療従事者は認識する必要がある。

以上のことから、舌部分切除患者における心理面の変遷について、新たな知見を得たものであり、歯科臨床の分野に寄与するところが大きいものと考えられた。

よって本論文は、博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成31年3月12日